

[寄 稿]

## 「ロイロノート・スクール」を活用した社会科・公民科教育法の 取組について

前田 武男\*

### Social Studies and Civics Education Methods Utilizing the LoiLoNote School

Takeo MAEDA\*

#### Abstract

As the new coronavirus infection spreads from the end of the 2019 school year, various educational activities that have never been experienced before have been tackled in order to somehow secure education for students, such as thorough basic infection prevention, temporary school closures, distributed school attendance, and online learning, as a response to the situation.

As a way to improve the teaching of social studies and civics education methods from the 2022 academic year, we planned classes that aimed to give students a real sense of the actual situation at school sites while taking into account the actual conditions at school sites in the Corona Disaster. In doing so, we placed particular emphasis on the perspective of active learning, that is, students learning and practicing independently, rather than passively.

We report on the class practice, including a study of the advantages of using the LoiLoNote as a tool for exchanging opinions and thinking in a face-to-face class in which sufficient consideration was given to infection prevention measures.

**KEY WORDS :** Teaching research, ICT application, development of social science teaching materials

## はじめに

2019年12月13日に補正予算案が閣議決定され、児童生徒1人1台の学習者用コンピュータとそれを活用するための高速大容量の通信ネットワークを、今後5年間のうちに一体的に整備することが盛り込まれた。これが「GIGAスクール構想」である。

しかし、2019年度終わりからの新型コロナウイルス感染症が拡大する中、その対応として、基本的な感染症予防の徹底、学校の臨時休校、分散登校、オンライン学習など児童生徒たちへの教育を何とか確保するためにこれまで経験したことのないさまざまな教育活動が取り組まれてきた。こうした中、学校ではその役割として、学習機会と学力の保障のみならず、全人的な発達・成長を促す役割、居場所・セーフティネット等が再確認された。休業中、学校からの指示がないと、児童生徒たちが学びを止めてしまったことから、自立した学習者としての育成に課題があることが明らかになった。

2021年1月、文部科学省は『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～』（中央教育審議会答申）を出した。この中で、目指す「令和の日本型学校教育」の姿は、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」であり、学校は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善により、学習指導要領にある3つの柱をバランスよく育むことが示された。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現するため、ICTの効果的活用と少人数によるきめ細かな指導体制の整備を両輪として進め、児童生徒一人一人に寄り添ったきめ細かな指導、学習活動・機会の充実を図る。カリキュラム・マネジメントを充実させつつ、各教科等において育成を目指す資質・能力等を把握したうえで、とくに「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に生かしていく。その際、1人1台の端末を日常的に活用することで、児童生徒自身がICTを「文房具」として自由な発想で活用できるよう環境を整え、授業をデザインすることが求められる。また、不登校、病気療養、障害、日本語指導を要するなどにより特別な支援が必要な児童生徒に対するきめ細かな支援、個々の才能を伸ばすための高度な学びの機会の提供等についても、ICTのもつ特性を最大限

活用していくことが重視されている。

そこで、2022年度から社会科・公民科教育法の授業改善として、コロナ禍における学校現場の実態を踏まえながら、学校現場の実情を実感できることを目指した授業を計画した。その際、学生が受け身となるような授業ではなく、主体的に学び、主体的に実習すること、すなわち、アクティブラーニングの視点を特に重視した。

また、Society5.0時代到来に伴い、学校現場でのICTの利活用が進む中、教科教育法においてどのような内容をどれだけ指導すればよいのか、試行錯誤の段階ではあるがその指導法についても進めている。

## 1. 「社会科・公民科教育法」への導入

### (1)目的

筆者が担当する教職科目の一つである「社会科・公民科教育法」において、毎年、25名程度の履修者ではあるが、学生は受け身となる場合もあり、学生が主体的・能動的に学ぶ工夫が必要である。しかし、25名程度の授業といえども、コロナ禍の対面授業においては、密にならないような配慮からアクティブラーニングの手法を取り入れたグループディスカッション等の回数や頻度を従来どおりに行うことは困難である。

一方、「ポスト・コロナにおける新たな社会に向けて、デジタル技術を有効活用し、オンライン・リモートによる学びとキャンパスにおける対面の学びを効果的に組み合わせた新たな講義、実験・実習等の創出により、教育の質の向上を実現すべきである」ことが言われており、コロナ禍の中でも、感染対策を講じつつ、学生が納得できる質の高い教育の提供が不可欠である。

そこで、学習支援システムとして、ロイロノート・スクール（株式会社LoiLo社、以下、ロイロノート）を導入した。ロイロノートは約1万校、120万人の利用者が1日に計6億回、1人あたり500回、クラウドサーバーにアクセスしている全ての授業で使える授業クラウドである（2021年6月現在）。これまでも小・中・高校・大学等で多く教師が新たな授業デザイン開発に取り組み、全ての教科・領域で実践事例が報告されている。

本学では、2020年度後期から感染予防対策を行った上で対面授業が実施されてきた。本稿では、感染予防対策に十分配慮した対面授業の中で、ロイロノートを活用した授業実践を行ったので報告する。その際、意見交流やシンキングツールとしてロイロノートを活

用することで学生がどのような利点を感じているかについて検討することを目的とした。

#### (2)対象者

本学で社会科・公民科教育法を受講した22名の学生を対象とした。

#### (3)実施時期

2022年11月から2023年1月にかけての授業の中で実施した。この授業は2022年9月から開講しているが、ここまでに学習指導要領の趣旨や学習指導案、アクティブラーニングの手法等についての学習を十分積み、意見交換についてもある程度行うことができるスキルが身に付いている集団となっている時期である。

#### (4)講義の概要

本稿で対象とした講義は、「社会科・公民科教育法」である。本講義では、次の3つの到達目標を掲げ、授業を行っている

- ①学習指導要領に示された中学校社会と高等学校公

民科の目標や内容をその接続を踏まえて理解する。

- ②現代社会の社会問題に関するテーマの教材研究を踏まえ、ICT機器を有効に活用しながら、生徒の資質・能力の育成に資する中学校社会科、高等学校公民科の授業を構想できる。

- ③実際の授業場面を想定した学習指導案を作成でき、それに基づく模擬授業を行うことができる。

## 2. ロイロノートの導入

本学では2020年度に学内のWi-Fi環境が整い、100名を超える学生が同時にアクセスすることが可能な通信状態である。授業者の方でロイロノートの受講者学生分のログインID、パスワードを発行し、ノートパソコンやタブレット、スマートフォン等の端末で講義時にログインして利用方法について説明した。なお、ブラウザ（Google Chrome、Microsoft Edge等）で使っているため、OSの制約は特にはないことはとても汎用性が高い。（図1）



図1

本講義は、大学3年生を対象とし、開講している。ロイロノートを高校時に活用したことがある学生は、いなかったため、授業の画面を教室前方のスクリーン

に投影し、ロイロノートでできることを赤枠のアイコンの順に解説した。（図2）

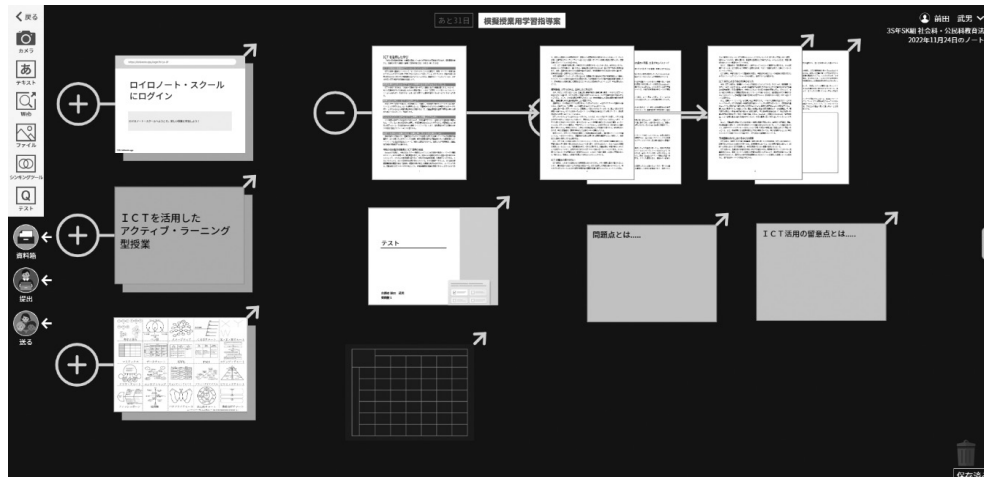


図2

特に、ロイロノートを利用することの意義について、導入時に説明を行った。さらに、2020年度以降の教育実習においては、学校現場においてはICT機器を取り入れた授業が順次取り入れられるようになってきている実態を説明した。また、コロナ感染拡大が続く中において、実際の研究発表の場である学会や会議はオンライン開催になっているなどの状況も付け加えた。

また、コメントの交流や利用にあたっては、顔や名前が分からない状態で、相手に意見やコメントを送ることになる人が多数である。それぞれが安心して発表できるように集団づくりに十分配慮した声掛けを行い、コメント機能利用時に相手の気持ちを十分考え意見を述べることなどの留意点について説明をした。コメント機能については、授業者に履歴が残ること、不適切な発言、傷つくような発言があった場合には、すぐに授業者に申し出ることを十分伝えた。以後の授業で、不適切な書き込みや使用が認められた場合は、使用の制限など検討することをあわせて周知した。

講義内で利用したロイロノートの機能は、以下のとおりである。

- ・各回、写真機能を使い、手書きで書いた「ノート」を撮影し、提出箱に提出する。
- ・講義内で授業者の問いかけや課題に対し、意見や考え、結果をカードに記入し、提出箱に提出したものを回答共有する。（例：GIGAスクール端末の不適切な運用に関する新聞記事を読んだの意見について）（図3）
- ・メッセージ機能を使い、授業担当者宛にメッセージを送信する。
- ・（発表閲覧後）メッセージ機能を使い、他の受講者宛にメッセージを送信する。
- ・シンキングツールの種類、取り込み方法を実際に行い、ブレインストーミングを行う。
- ・webカードを利用し、講師が提供したwebカードからwebページを開く。

これらの基本機能を組み合わせ、「共有する」「記録する」「可視化する」「振り返る」ことを授業の中に、取り入れることが可能であることを実感させる演習を行った。

提出物A		提出物A		提出物A		提出物A	
<p>IC T活用の留意点とは..... ○自由に書き込まず ○先生がIC Tの活用を促している ○日報からSNSなどを管理しておく</p>	<p>問題点とは..... ・児童生徒に対するタブレット使用の指導ができていない。 ・パスワードが全員一致であった。 ・IC Tが限定的で検閲しやすかった。</p>	<p>問題点とは..... 学校が使っている端末なのに教員の目が行き届いておらず開放になっていること。</p>	<p>問題点とは..... 教師や親から離れた空間が作り出され、生徒間でトラブルが発生しやすくなる。また、それに気づくことができなくなる。</p>	<p>問題点とは.....他人を誤ってログインして不正利用することや保護者のチャットなどが野放しだった可能性が高いこと。</p>	<p>問題点とは..... IC Tという慣れない機器を使わせているにも関わらず、管理が甘い。</p>	<p>問題点とは..... IC Tで授業をするためのIC T端末も購入しているが、授業中に活用できていないIC T端末も残っていること。</p>	<p>問題点とは..... IC Tという慣れない機器を使わせているにも関わらず、管理が甘い。</p>
<p>IC T活用の留意点とは..... ・マネーやモデルを守る ・授業の期間、生徒全員が活用することができているかの確認</p>	<p>問題点とは..... ・授業しやすくないパスワード ・野放しのチャット ・端末を使用するにあたってのIC Tの活用を促していない</p>	<p>問題点とは..... 他人のIC Tが予測できず容易なものであり、簡単に自分のアカウントにログインできる状態だったこと。</p>	<p>問題点とは..... IC T機器を活用する際のID・パスワードの厳密な管理を行わず、重複性を指摘しなかったこと。</p>	<p>問題点とは..... 空室に推奨できるアカウントIDであることパスワードが全員共通であったこと。</p>	<p>問題点とは..... IC Tという慣れない機器を使わせているにも関わらず、管理が甘い。</p>	<p>問題点とは..... IC Tという慣れない機器を使わせているにも関わらず、管理が甘い。</p>	<p>問題点とは..... IC Tという慣れない機器を使わせているにも関わらず、管理が甘い。</p>
<p>問題点とは.....IC Tを活用していくことによって社会的な管理などの慣れが問題点であると考え。</p>	<p>問題点とは..... 全員が同じパスワードと他人のIDが容易に想像できる事が問題であり、パスワード変更を促す指導させるのではなく通知しただけなのも問題である。</p>	<p>問題点とは..... ログインへのアクセスが簡単である状態だったということ。</p>	<p>問題点とは..... IC T機器を活用する際のID・パスワードの厳密な管理を行わず、重複性を指摘しなかったこと。</p>	<p>問題点とは..... 空室に推奨できるアカウントIDであることパスワードが全員共通であったこと。</p>	<p>問題点とは..... IC Tという慣れない機器を使わせているにも関わらず、管理が甘い。</p>	<p>問題点とは..... IC Tという慣れない機器を使わせているにも関わらず、管理が甘い。</p>	<p>問題点とは..... IC Tという慣れない機器を使わせているにも関わらず、管理が甘い。</p>
<p>問題点とは..... IC Tという慣れない機器を使わせているにも関わらず、管理が甘い。</p>	<p>問題点とは..... IC Tという慣れない機器を使わせているにも関わらず、管理が甘い。</p>	<p>問題点とは..... IC Tという慣れない機器を使わせているにも関わらず、管理が甘い。</p>	<p>問題点とは..... IC Tという慣れない機器を使わせているにも関わらず、管理が甘い。</p>	<p>問題点とは..... IC Tという慣れない機器を使わせているにも関わらず、管理が甘い。</p>	<p>問題点とは..... IC Tという慣れない機器を使わせているにも関わらず、管理が甘い。</p>	<p>問題点とは..... IC Tという慣れない機器を使わせているにも関わらず、管理が甘い。</p>	<p>問題点とは..... IC Tという慣れない機器を使わせているにも関わらず、管理が甘い。</p>

図3

### 3. ロイロノートの活用

ロイロノートを導入後、班で取り組む模擬授業の学習指導案や授業構想の活動において、学生が調べてきた内容を、写真やカードにまとめ、班員に送信して、情報共有する場面がみられた。具体的には班のメンバー（5～6名）の役割分担、進捗状況や課題内容を閲覧し、自分自身の意見をコメントカードで交流を行った。これまでは、授業以外の時間に集まり、対面で同様のことを行っていたが、早速、共通のプラットフォーム（共有ノート）で班活動に取り組める利点を活用する場面がみられた。これは、同時期に行っていた、「事前事後指導」での演習課題にも共通するもので、学生各人が積極的に他者と協働して取り組もうする機会と重なったことも、活用を深める契機となっていた。

本講義では当初、模擬授業の学習指導案及び関連資料については、紙ベースでの提出を予定していたが、ロイロノートの「提出箱」を利用して、電子データ（カラー資料、音声、動画も可能）で提出することに変更し、授業でのロイロノートを用いたICT活用の工夫が各班で活発に進むことになった。

### 4. 導入後の考察

ロイロノートを授業に導入し、実際に触れて、その効果やどのように活用するかなど、活発な意見交流がみられた。それらの中で、特に多かったのが、次のような意見であった。

- ・他の人の発表をロイロノートを通して閲覧することは、とても参考になった。
- ・自分以外の他者の考えを、とても知ることができた。
- ・発表交流の方法としてロイロノートの中のシンキングツールを用いたグループワークは理解を深めるうえで、効果的である。
- ・自分ペースでゆっくり閲覧することができたり、見返すことができる。
- ・多くの人の意見を効率よく知ることができ、自分の知識を広げることに役立った。
- ・話すことが苦手でも文字で伝えることで自分の意見を伝えやすいという利点を感じていることがわかった。

「ロイロノート」を用いて、その有効性を実感するとともに、演習の中で気付いたり、出てきたさまざまなアイデアを自分も授業の中に取り込みたいと、感じ

る学生が多数であった。また、学生はあらためて教職課程の意義を感じることができた感想も多くあった。

### おわりに

ICT活用は、1980年代以降、これまでも幾度となく教育現場に求められてきた。スキル獲得に重きが置かれ、量的側面から迫ろうとする取組も散見された。ICTを活用して学習を進めるにあたって、留意しなければならないことは、ICT活用が学習内容の獲得や定着にどのように資するか、ということである。そこで注目すべきことは、ICT活用のよさについてである。たとえば、繰り返しが可能、個別のニーズに対応、大きく提示、資料の豊かさ、動画等などが挙げられる。これらのよさは、学習の構成を考えるうえで重要なポイントである。

さらに、児童生徒の「個別最適な学び」に資するかどうかについて着目する必要がある。さらに配慮すべきことは、ICT活用により時間的・空間的な共有、つまり「協働的な学び」を奪っていないかということである。また、ICTを使うこと自体が目的にならないようにすることである。

ICT活用を、学習を進めていく児童生徒の側面と、学習全体の組立てという指導者の側面の双方におけるメリットとデメリットについて十分検討し、どのような場面で活用することが最適であるのかを常に考えながら活用することが望まれる。

### 【文献一覧】

- 1) 文部科学省『中学校学習指導要領』2017
- 2) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 社会編』2017
- 3) 文部科学省『高等学校学習指導要領』2018
- 4) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』2018
- 5) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 公民編』2018
- 6) 『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～』（答申）中央教育審議会2021
- 7) 新版 社会・地歴・公民科教育法 白井嘉一・柴田義松編 2014
- 8) 社会科・地歴科・公民科指導法 手島純編 2022
- 9) 中等社会の理論と実践 二谷貞夫・和井田清司編

2013

- 10) 学びの意味を追究した中学校公民の単元デザイン 草原和博・川口宏美編 2021
- 11) 3時間で学べる「令和の日本型学校教育」Q&A 新しい学習指導要領を研究する会 2022
- 12) ロイロノートのICT“超かんたん”スキル 和田誠編 2022

Received date 2022年12月13日

Accepted date 2022年12月13日